François RECANATI (2008) *Philosophie du langage (et de l'esprit)*, Gallimard

酒　井　智　宏

分析哲学の共通言語は英語であり，この分野でのフランス語使用者は少数に過ぎない．多くの読者を得たければ英語で書くしかない．だから，80年代以降，もっぱら英語で書いてきた．しかし，フランスの学界のことを忘れたわけでは

ない．フランスの学界との再接近を図りたい…レカナティがそんな思いを込めて約30年ぶりにフランス語で書いた言語と心の哲学の入門書である．

第Ⅰ部：意味と指示，第Ⅱ部：意味と使用，第Ⅲ部：意味と心的表象，第Ⅳ部：言語・世界・思考という四部構成で，これに参考文献，注，16ページにわたる詳細な用語解説，人名索引が続く．入門書とは言え，言語哲学になじみのない読者にはかなり読み応えのある内容となっている．以下では，本書の内容の簡単な背景説明を行いたい．

言語表現の意味とは何か．この哲学上の重大な問いに対する有力な答えの一つが「言語表現の意味とはその指示対象である」というものである．これと競合する答えの一つは「言語表現の意味とはその心的表象である」というものであるが，これに対しては再び「心的表象の意味とは何か」が問われてしまい，問題の舞台が「言語的表象」から「心的表象」に移されるだけである．言語は表象にとどまってはならず，どこかで世界と結びつかねばならない．その世界の側に位置するのが指示対象である．

「意味 = 指示対象」という図式で問題が片付くなら言語の問題に哲学の出る幕はなかっただろう．この図式では（1）Émile Ajar est Romain Gary. や（2）Pégase n'existe pas. といった文の意味が説明できないのである．(1)は「a = a」という自明の同一性言明となり，（2）は「bは存在しない」という矛盾した言明となってしまう．ここで引き合いに出されるのが「意義」「記述」「内包」といった意味の第二の相である．これらは，呼び名や定義は異なるにせよ，いずれも「指示対象」だけでは意味の問題が説明できないことを踏まえて提案された概念である．これによると，例えばPégaseという語は指示対象を直接指すのではなく，まずある記述と結びつけられ，その記述を満たす対象を指示対象として選び出す．（1-2）はそれぞれ「固有名Émile Ajarと結びつけられる記述と固有名Romain Garyと結びつけられる記述の両方を満たす対象が存在する」「固有名Pégaseと結びつけられる記述を満たす対象は存在しない」という有意味な一般命題を表す．この考え方は記述主義（descriptivisme）と呼ばれる．記述主義を突き詰めると，Pierre est venu. といった簡単な文さえ，実は，ピエールの持つ属性を $P_1, P_2, \ldots P_n$ とおくと，「P_1 であり，かつ P_2 であり，かつ…P_n であるような何らかの対象が来た」という一般命題を表すことになる．ラッセルの用語で言えば，ピエールに関する我々の知識は，直知（knowledge by acquaintance）ではなく，記述知（knowledge by description）である．我々はピエールという個人を直接知っていると思っているが，それは幻想である．だが，はたしてそれでよいのか．こうした問いから哲学が始まる．

我々は本書で解説されている豊かな哲学的洞察をフランス語学の研究に生かしていかなければならない．レカナティが「もう二度とフランス語では書かない」と言い出さないように…　　(跡見学園女子大学)